

No. J2206

近現代の中国ムスリムにおける共同体意識の構築：「ウンマ」概念に対する理解から

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士後期課程 3年

何 家 敏

本研究は、「ウンマ」という、しばしばコミュニティと訳されるアラビア語の中国語訳語を切口に、近現代中国ムスリムがいかなる共同体意識を抱き、近現代において中華文明とイスラーム文明の交流、即ちシノ・イスラーム思想がいかなるものになったかを究明したい。助成期間では、①中国国内で活動する歴史研究者らとの意見交換、②日本国内では入手困難な史料の収集、及び③清真寺（モスク）の見学を実施した。

2023年5月10日から16日までは上海市に滞在し、③の活動を行った。具体的には、松江清真寺、小桃園清真寺といったモスクを訪問した。モスクの管理者や宗教指導者から、礼拝の様子やモスクの改築に関する歴史経緯を伺った。その結果、21世紀以降、脱アラブ化・中国化が唱えられるイスラームの現状の一側面を掴むことができた。

2023年5月18日には西安市の西安外国語大学を訪れ、①と②の活動を実施した。具体的には、本研究の研究対象と親交があるムスリムらや同時代の注目すべき事件について情報を収集した。また、関連書籍と史的資料の17点を閲覧・収集した。そこから、これまでほとんど研究に取り上げられなかったムスリムらに注目し、さらに掘り下げると考える。即ち、ムスリムが多数居住する国々だけではなく、ソビエト連邦、フランス、アメリカ、日本などに留学した人々も存在する。彼らは西洋哲学や化学などを専門とし、イスラーム学以外の知的背景を持っており、科学と民主主義を追求する近現代中国の諸思潮との親和性が高く、当時のムスリムの共同体意識が一枚岩ではなかったことを示唆している。

2023年5月30日～6月3日にかけては北京市で、①、②と③の活動を行った。具体的には、本研究の研究対象であるムスリムの知的ネットワークについて多くの助言を受けた。また、関連書籍と史料を7点収集した。その結果、当該ムスリムは、伝統的なシノ・イスラーム思想を主として、1930年頃エジプトで流行していた思潮を補完的な要素として取り入れたことが指摘できる。モスクの見学に関しては、牛街清真寺などを訪れ、上海での見学と同様の結論に至った。